

Paula Alonso,

*Between Revolution and the
Ballot Box: The Origins of
the Argentine Radical Party
in the 1890s.*

Cambridge and New York: Cambridge
University Press, 2000, xiii+242pp

まつ した ひろし
松 下 洋

はじめに

本書はアルゼンチンの代表的政党のひとつである急進党（正称は急進的市民同盟：Unión Cívica Radical，以下 UCR と略）に関する研究である。UCR は1891年に創設され、当時の支配政党だった全国自治党（Partido Autonomista Nacional，以下 PAN と略）による選挙操作（有権者名簿の改竄や水増し投票など）に抗議してしばしば選挙ボイコット戦術をとり、また武装蜂起も企図した。この戦術は保守派に脅威を与え、1912年に選挙制度を改正させることに成功した。そして、新制度に基づく最初の大統領選（1916年）で勝利し、30年の軍事クーデターに至るまで政権を担当した。この間に大学改革（1918年）を実施し、教育の近代化にも一役買った。第2次大戦後はペロニスタ党の後塵を拝してきたが、それでも同党の、もしくはその流れを汲む政権が1958年、63年、83年に誕生しており、99年に発足した与党連合政権のデ・ラ・ルア（Fernando De la Rúa）元大統領も UCR を母体としていた。

こうした軌跡が物語るように、同党はアルゼンチンの政治的民主化や社会の近代化に少なからぬ役割を果たしてきたと見なされ、今日まで数多くの研究がなされてきた。しかしながら、従来の研究は1916年以降の政権担当期か、もしくはその後の時代に焦

点を合わせる傾向があり、結党直後の時期に関する本格的な研究は少なかった。本書はこうした研究上の空白を埋めることを目指すと同時に、結党当時の一次資料を入念に精査して初期 UCR に関する従来の通説を批判し、ひいては20世紀のアルゼンチン政治の特質に肉薄しようとした極めて意欲的な研究である。なお、著者はアルゼンチンで政治学を修めたあと、オックスフォード大学に留学し、本書の基となった博士論文で博士号（政治学）を取得した。現職はブエノスアイレス市のサン・アンドレス大学の助教授で、アルゼンチン史を講じている。

I 本書の構成

本書は、序と結論のほかに、以下の6章からなっている。なお、括弧内は評者が追加したものである。

- 第1章 政治的アリーナ（1881年 PAN 成立後のアルゼンチン政局）
- 第2章 政府批判の高揚（1889～90年）
- 第3章 短命に終わった市民同盟（1890年7月の蜂起失敗後の政局）
- 第4章 UCR の行動軌跡 その1（1891年の UCR の結党から1893年の蜂起失敗まで）
- 第5章 UCR の行動軌跡 その2（1893～98年）
- 第6章 UCR の衰退（1898年以降の UCR の衰退と20世紀初頭におけるイポリト・イリゴージェンによる党の再建と政権掌握まで）

以下本書の内容を章別に述べておこう。まず、序において、従来の UCR 研究が1916年以降に集中し過ぎていたことをはじめとして、先行研究への批判が展開される。第1章では1880年代のアルゼンチンがロカ（Julio Argentino Roca）大統領（1880～86年）の下で、政治面では PAN による全国支配が達成され、経済的には外国からの移民と資本の流入によって農牧国として大発展したプロセスが描かれる。第2章ではロカを継いだフアレス・セルマン（Miguel Juárez Celman）大統領（1886～90年）が中央政府の権限を最大限利用して

強引な統治を試みたために反感を買い、1890年4月に反政府組織として市民同盟（La Unión Cívica、以下UCと略）が結成され、さらに同年7月にはUCによる武装蜂起が失敗に終わった過程が述べられている。第3章ではUCのミトレ派とPANのロカ派との合意（1891年1月）をきっかけに、これに反対するUC内の強硬派が同年6月にUCRを結成した経緯が分析される。第4章では結党後のUCRの動向が最高指導者アテム（Leandro Alem）の言動を中心に跡付けられ、なかでも1893年7月から9月にかけて、UCRが国内諸地域で企てた蜂起の実態が詳述される。第5章ではUCRが1893年の蜂起失敗を教訓に議会主義へと転じたことを明らかにし、同党が選挙に無関心だったとする通説に批判を加えている。第6章では1896年以降のUCRがアテムの自殺や党内の路線争いなどから衰微し、98年には解党に追い込まれたが、1903年にイリゴージェン（Hipólito Yrigoyen）により再建された過程が描かれる。結論では、UCRの政治路線が伝統墨守型であったこと、また、結党当時の同党が唱道した非妥協主義がアルゼンチン独特の協調を好まぬ政治文化を育み、その影響が20世紀にも尾を引いたことを指摘して本書を結んでいる。

このように、本書はUCRを軸に19世紀末のアルゼンチン政治を見直し、多くの一次資料を駆使してUCRに関する従来の通説を批判しようとしたものである。批判の対象は多岐にわたっているが、以下においては、紙幅の関係から特に注目に値すると思われる4点、すなわち、PANと比較したUCRの性格規定、UCRの革命路線、貿易政策、選挙制度、に絞って通説をどのように批判しているかを検討してみたい。

II UCRの性格規定をめぐる

まず第1にPANと比較した場合、UCRの性格をどう規定するかという問題について見てみよう。通説ではPANが保守派だったのに対してUCRは近代化の担い手だったとされているが、著者はこうした理解は少なくとも初期のUCRにはあてはまら

ないという。この点を論証するために著者はまずPANを保守的とする見方に批判を加え、その機関紙の分析を通して同党が農牧業の発展に全力を傾注しただけでなく、経済発展を足がかりに公德心の向上や政治改革に期待をかけていたことを明らかにしている。つまり、PANは頑迷な保守政党ではなく、ある種の改革を志向していたというのである。

これに対して、UCRは近代化の担い手というよりは、むしろPANの経済発展政策によって引き起こされたさまざまな変化に対する反対者として立ち現れた、と著者は見る。言い換えれば、UCRは自らを「近代化の担い手としてよりもむしろ、アルゼンチンの政治的伝統と1853年に定められた憲法の諸原則の擁護者」（p.9）として位置付けていた。つまり、UCRは、1860年代から70年代にかけて確立された憲法の諸原則が80年代にPANの支配下で歪められたと見なし、その是正を自らの使命と考えたのであった。なかでも1880年代に生じた変化のなかでUCRが批判してやまなかったのは、政治面では大統領への権力集中に伴い、三権分立の建前が崩れ、個人の自由が制限されるに至っていること、社会面では80年代の経済発展が国民のモラルを低下させたことなどであった。このように1880年代を否定的に捉えるUCRにとって唯一の解決策は、70年代に確立された政治的慣行を復活させること（p.99）にほかならなかった。とすれば、UCRは近代化の担い手としてよりも、むしろ伝統の擁護者と見られるべきである。こうしたUCRの把握は極めて斬新であり、またPANとUCRの機関紙を入念に精査したうえでの主張だけにかなりの説得力を持つように思われた。

III UCRの革命路線の意味するもの

評者にとって興味深く思われた第2の論点は、UCRの革命論をめぐる著者独自の解釈である。著者は革命という言葉がヨーロッパ史では2つの異なった意味で使われていたことを指摘する。ひとつは過去への復帰をも含意した循環的の革命論であり、為政者による権力乱用から国民を解放し、以前の望ま

しい制度を復活させることがその好例とされる。この概念は17世紀の英国の市民革命や18世紀のアメリカ独立革命の際にもはやされたが、やがてフランス革命を契機として、過去との断絶を意味する第2の革命論としての単線の革命論が登場し、前者にとって代わった (pp.111-112)。後者の見方に従えば、革命とは過去との断絶であり、歴史における進歩を意味していた。革命をめぐる2つの理念型のうち、言うまでもなく、UCRが採用したのは前者であった。なぜなら、UCRの目的は「いかなる改革も意図せずに制度を復活させること」(p.113)に限定されていたし、UCRのリーダーたちが英国の市民革命論に影響を受けていたことも明らかだったからである。

とすると、伝統の擁護のために革命を目指したUCRの言説はアメリカ独立革命の論理と共通していたことになるが、この種の共通性を指摘したのは管見する限り本書が初めてである。ここにも著者の独創性が窺える。しかしながら、確かに指導者の言説レベルではアメリカ革命と類似した循環的革命論が認められたとしても、本書が対象とする19世紀末に起こった2つの革命事件(1890年のUCによる蜂起と93年のUCRによる蜂起)には、大衆の参加があったことは明らかだった。言うまでもなく、大衆が蜂起に加わったのは、UCRの循環的革命論に共鳴したというよりも、彼らを取り巻いていた諸問題(物価騰貴や劣悪な労働条件など)への不満があったからであろう。したがって、UCRの革命論を語るには当時の社会状況の分析が不可欠と思えるのだが、19世紀末にはUCRは特定の社会勢力を代弁していなかった(p.162)として、著者がUCRと社会との関係への言及を意識的に避けているのは残念である。

IV 貿易政策

同様な問題点を貿易政策に関する本書の記述にも指摘できる。通説では地主層を支持基盤としたPANが自由貿易論者だったのに対し、UCRは保護主義を主張したと解されているが、本書では1893

年の蜂起失敗後、議会活動に力を入れたUCRが議会では自由貿易の論陣を張ったことが明らかにされている。もっともUCRの自由貿易支持についてはほかの研究者によっても指摘されている。たとえば、オーラ(Roy Hora)は、1890年代にはPANがある種の工業保護に賛同したのとは対照的に、UCRは自由貿易を支持したとしている。彼の研究で注目されるのは、UCRの支持基盤のひとつをリトル地域(東部のラプラタ川に接する地域)の地主層と見て、彼らの要求に応える形でUCRが自由貿易を支持したとしている点である[Hora 2000, 476]。これに対して、本書では消費者を擁護するために自由貿易を主張した(p.173)とあるが、論証は一切なされていない。言い換えればすでに触れたように19世紀末にはUCRがいかなる社会勢力も代弁していなかったというのが本書の基本的立場であるために、自由貿易論を通してUCRがどのような社会勢力と結びついたかは、不問に付されてしまっているのである。

V 選挙制度

最後に選挙とUCRとの関係についての本書の主張を検討してみよう。すでに触れたように、通説ではUCRの選挙ボイコットと革命戦術に脅威を覚えた保守派が譲歩して1912年に選挙制度が改革され、16年の大統領選では大衆の支持をバックにUCRのイリゴージェンが勝利したとされる。これに対して、著者は男子普通選挙制度が1821年にブエノスアイレス州で制定されたのを皮切りに州政レベルでも国政レベルでも実施されていたことや成人男子の投票率は98年の大統領選では43%(p.150)に達していたことなどを挙げて、男子普通選挙が1912年に始まったのではないことに注意を喚起している。また、1890年代には、投票者の45%が労働者、42%が中産階級であった(p.153)ことなどから、「1912年に至って初めてエリートが労働者と中産階級の政治参加を“許した”のではなかった」ことを強調している(p.162)。さらに、PANによる選挙操作も同党の勝利を必ずしも保証するものではなかったという。

その証左として UCR が1894年のブエノスアイレス市と同州の選挙で勝利したこと (p.132) や、92年から96年にかけて、首都圏で複数の政党が候補者を擁立した63選挙区の内、UCR が43区で勝利を収めたこと (p.159) などを挙げている。

これらの事実のうち、19世紀に男子普通選挙が部分的にすでに存在したことは類書でも指摘されており、必ずしも目新しいことではない [Sábato 1998, 13]。しかしながら、首都圏における選挙結果の数量分析はオリジナルな試みであると同時に、本書の重要な貢献と言ってよいだろう。というのは、これらの事実は選挙法改正をめぐる解釈と深くかかわっているからである。なかでも1912年以前にすでに中産階級がかなり選挙に参加していたとの事実は、次のような問題を提起しているように思われる。たとえば、すでに選挙に参加していたならば、中産階級が何故選挙ボイコット戦術をとる UCR を支持して選挙制度の改正を求める必要があったのか。また、一部の研究者は、保守派が選挙制度の改正に応じたのは、中産階級を労働者（その多くは外国人で選挙権を持たなかった）から離間させ 体制内に包摂させるためとしているが [Rock 1975]、1912年以前にすでに中産階級が選挙への参加を通して体制内に包摂されていたとしたら、この解釈は妥当なものであろうか。さらに、UCR が1912年の選挙制度改正に果たした役割はどう評価すべきなのか。これらの問題は19世紀末を主な対象としている本書では詳しく検討されていない。ただし、選挙法改正に果たした UCR の役割については、著者はそれを本書の範囲を超える問題としつつも、近年の研究は改正を「UCR の「圧力」の結果としてみるよりも、著しく分断されていた PAN 中の有力な政治家たちによってとられた政策の帰結と解釈する傾向にある」（p.212）と述べている。著者もこうした新しい研究傾向に組していることは明らかだが、今後は著者自身の手で、20世紀初頭の時期における UCR の歩みを、本書と同様に入念な資料精査に基づいて明らかにして欲しいものである。その過程で選挙法改正について新解釈が提示されることを期待したい。

VI 若干の結語

以上見てきたように、本書は UCR の行動の軌跡を19世紀末に絞って考察し、従来の通説にさまざまな角度から批判を試みた、いわゆる修正主義的な歴史研究である。その主張は、一次資料に裏付けられたものだけに かなりの説得力を持つように思われる。ただし、次のような疑問を感じたことも否定できない。

第1は、19世紀末という限られた時期の急進党の分析から、党の特質をどこまで一般化して抽出できるのかという問題である。著者はこの時期の急進党のとった非妥協主義がアルゼンチンに協調を拒否する政治文化を植え付けるのに寄与したとしているのだが、1912年以降は選挙への参加を通して、UCR は民主主義と議会政治の進展に寄与したのではないのか。要するに、19世紀末だけから UCR の一般的性格を論じるには無理があるように思えるのである。

第2に、本書では UCR と社会勢力との関係はほとんど考察されていない。これは、著者が実証を重視し、19世紀末には UCR と社会勢力との間に明確な関係はなかったという立場をとっている以上当然だと言えるかもしれないが、その一方で1910年代以降は特定の社会階級との結びつきがより明確となったことを認めている (p.162)。とすると、1910年代との比較において、19世紀末にはどのような条件が UCR と社会勢力との間の明確な支持関係の構築を阻んでいたかを、詳しく説明すべきだったであろう。要するに、「政治の場」だけでなく、「社会の場」での UCR という側面をもっと論じていれば、よりダイナミックな UCR 研究になったのではあるまいか。

こうした問題点を感じたとはいえ、歴史研究が修正主義の登場によって一層の進展を見せるものだとすれば、UCR 研究における本格的修正主義ともいえるべき本書は UCR の解釈に新たな問題を提起しており、同党に関する研究の深化に資するものであることは間違いないであろう。

文献リスト

Hora, Roy 2000. “Terratenientes, empresarios industriales y crecimiento industrial en la Argentina: los estancieros y el debate sobre el proteccionismo (1890-1914).” *Desarrollo Económico* vol. 40 (octubre-diciembre).

Rock, David 1975. *Politics in Argentina, 1890-1930: The Rise and Fall of Radicalism*. London: Cambridge University Press.

Sábato, Hilda 1998. *La política en las calles: Entre el voto y la movilización, Buenos Aires, 1860-1880*. Buenos Aires: Ed. Sudamericana.

(神戸大学大学院国際協力研究科教授)